
若干憂鬱だ。

はや猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若干憂鬱だ。

【Nコード】

N2334M

【作者名】

はや猫

【あらすじ】

日常の中で起きる些細な変化。すぐくくだらないお話です。

（前書き）

初めての作品です。評価やおかしな所、バンバン指摘して下さい！

唐突なのだが俺は幼い時に火傷をしそうになったことがある。理由は簡単。炊飯器だ。

炊飯器の蓋からもくもくと天井高くまで上りいつの間にか消えていく、そんな揺れる蒸気を幼心に触れてみたいと思い、その煙に手を伸ばしてみた。結果は当然、熱い。かなり熱い。俺はびっくりして水道の蛇口を捻り、急いで手を水で冷やした。何でこんな事したんだろう、と反省した。俺は二度と炊飯器に触れやしない、とひっそり誓った十一の夏休みだった。

時が過ぎ、大きくなって中学生。十四才。

俺は至って普通に育ち、気ままに生活を送っていた。つまらなくいつも通り過ごしていたある日のこと。学校から家にたどり着き、けだるく玄関にただいまと言う。居間前の廊下を通り過ぎた時、ふと耳に居間から声が聞こえてきた。

母の声だ。何やら電話をしているようだ。

だが何を言ってるのかはよく聞こえないし、正直興味が無いから俺は早く遊びたいがために二階へ早足で駆けてった。

とある日のことだ。買い物に出かけていた母が帰宅するなり、満足げに言う。

「今日ね、新しい炊飯器かったのよ。多分おいしいわよ」

嬉しそうな母をよそに、俺は正直どうでもよかったから適当に「ふん、」とだけ相槌をうった。だって、買い替えても所詮米は米。変わることもないだろう？

その夜、新しい炊飯器とやらで出来た炊きたての米を見据える。ふん、いつもと変わらないじゃんか。俺はそう思い、目の前にある綺麗に炊けた米を口に運ぶ。

もぐ、もぐ。

「……うまい。」

普通にうまかった。

なんというか、こう、米のべちよべちよ感がないというか。とにかく、うまかったんだ。

そいつが中々おかずにちょうどよくて何杯かのお代わりをした。

もぐ、もぐ。

うん、うまい。たくあん食いてーな。あ、母よ、茶をくれ。……ちよ、それ兄貴のコップ！

その後俺は風呂、歯磨きを終え、寝る準備を終える。時間は午後10時。疲れていた俺は自室のベッドに腰掛けると同時に、強い睡魔が俺の頭をピンポイントに狙ってくる。

「……ふわぁ、あ……」

ぼふん。

眠くてベッドに倒れ込んでしまった。

駄目、もー限界かも。

俺は一日ゆっくりと振り返る。

はあ、今日は疲れたな。体育はホントやだよ。走りたくないな。マラソンとか何がしたいんだろうか？よくわからんな。あー、やば寝そう。寝そうだー……。

「はッ!？」

嫌な夢で目が覚める。汗でべとべとな背中感触がすごく気持ち悪い。

時間は午前2時。土も木も寝静まる時間だ。もちろん普通に規則正しい人間も寝る時間である。当たり前だなあ。……まあ、それはいいとして、だ。「のど、渴いたなあ……」

だるい体を起こして、水分補給を訴える喉を癒すため台所へ向かう。あ、ついでに服替えよ。

「……まさかゾンビが新聞読むとはな……」俺は台所に向かいながら先刻見た夢を思い出す。

すごく不気味な夢だった。朝起きて、朝食をとろうとしたら親父の席になんかいるんだ。新聞で顔は見えないのだが、新聞を持つ手がなんか黒い。腐ったような手だった。昔酔った親父が言ってた親父バージョンフォーとやらかと思ったが様子がおかしい。

つかバージョンで何？変形すんのか？まさか飛べるとか？……ないか。

で、だ。親父もどきはいきなり新聞を下げて俺を見据えた。

——なんか、嫌な予感がする。……いや、なわけないか。大体俺の予感の外れる事が多いんだ。そうだ、そんなはず——

「うぎゃああああっ!!」

当たりました見事に。ゾンビでした。しかも片目とれそう。マジ怖いよっ!?

「なあ、お前進路はどう考え——」

ここで起きました。もうこれ以上は話したくありません。軽いトラウマです。

色々考えていると台所に到着した。暗いのももちろん明かりは点ける。

さて、冷蔵庫物色タイムだな。

中には、

牛乳、水、コーヒーしかなかった。

……なんか甘いもの置いといてよ。

俺は苦渋の選択で牛乳を選んだ。

……賞味期限が昨日までになってんだけど。腹痛めないかなコレ？

ごくっ、ごくっ。あー、うまいわ。喉に潤いがやってきた。気持ち

いいな！。

うし、そろそろ寝直そうかな。そう思い台所に背を向けたとき足元に何かがあった。

「……？」

そこにあっただのは、以前俺を火傷寸前にまで追い込んだ憎き炊飯器だった。

そいつは既にビニール袋に入れられており、こいつはもう用済みになったのだと言われた気分になった。

ここで俺は思い出した。この炊飯器に手をかざして後悔したことを。二度と触るもんか、と。

……まあ、俺が悪いんだがさ。

俺はきつく締められたビニール袋をほどき、汚れて薄くなった白い炊飯器を手取る。

うわ、なんか長い年月を感じるぞ。いろんなところに傷があったり、蓋を開ける部品はスカスカで今にも外れそうだ。

俺は思った。こいつはこんなになるまで、うちでご飯を炊き続けてきたんだなって。

思い返すたいした思い出なんてない。ただ火傷しそうになったのと、米がべちょべちょしてたことしか浮かばない。

すげーどうでもいいことばかりだな。

お米美味しくなかったな。断然今の炊飯器の方がいいはずだ。絶対そうだ。

……だけど、まずくてもそれ食って生きてきた俺にとっては母の味的なものなんだろうな。だから俺は今少し寂しく感じている。

なんつーか、生活がより良いものになるのはうれしいんだけど、変わらないでいて欲しいものもあると言うか。なんか、切ないな。

何で、変わらずには居られないんだろうな。

俺は深くそう思った。

誰かが言っていた。

変わらないものなんてないと。
今この瞬間にそれを痛感した。

「……ふう」

ああ、眠くなってきた。部屋に戻ろう。明日は寝坊するわけにはいかない。早く寝よう。

炊飯器をビニール袋で包み元の場所に置く。これで最後かな、触れるのは。

最後に一つだけ、

「……ごちそうさん」
そう言った。

あー、明日は調理実習か。面倒くせー。なんかもう、
憂鬱だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2334m/>

若干憂鬱だ。

2010年10月22日00時43分発行